

友林蘇岐



大正二年一月二十三日印刷
 大正二年一月二十五日發行
 編纂發行人 安井正夫
 長野縣西筑摩郡福嶋町四〇番地
 印刷者 鬼澤忠雄
 長野縣松本市木町百八拾四番地
 全縣全市全 番地
 印刷所 交文社
 長野縣西筑摩郡福嶋町二八九番地
 發行所 蘆澤書店

○岐蘇林友
 目次
 年頭の祝詞に代へて、安藤校長
 學術、建設電柱の、七宮生
 保國方法、北村生
 中央木の直經、洋舟生
 及高さを測る法、
 林業見聞録、
 入會權の效果、
 山林學校便り、
 校友消息、
 寄附會便り、
 朝鮮より、西野入徳
 佛部便り、
 蘇門會所感、曾山子
 雜報數件

年頭の祝詞に代へて

安藤 藤

○思ひ出多く忘れんとするも一生否精神の減びざる限り忘るゝ事の出来ぬ明治四十五年と大正元年も早過ぎて慈に謹んで大正二年の元旦を迎ふる事と相成候併し世は諒闇中に屬し吾等同胞は互光明あるべき新年を迎へながら平年の如く門松も立てず賀詞を述ぶる事もなく到處蕭條たる有様にて候殊に本校の邊は人里離れたる處とて舊冬の雪の名残尙深く四面只銀山を眺むるのみにて候嗚呼沈鬱悲涼の色に漂へる新年之がやがて國民が 明治聖天子に對し奉る誠意の發現にして舊日本は勿論新日本の領土にも限なく行き渡りたる此國民的誠意は必ず桃山御陵の英靈にも通すべきかと存せられ候誠には偉大なる感化は偉大なる感應を以て現はる外國杯にては到底斯様には參るまじく是も我日本特有の國民性の顯現に外なく彼の神經過敏の外人には如何許印象を與へるならんかと存候

堂に上り御眞影を奉拜し最敬禮を致すが通追想追憶につぎて皇室國家將本校の安寧幸例にて候然るに今年は當局よりの通牒も有る福を祈り本年の計畫を立つべく默誓し終つ之儀式廢止の事と致し候故何となく不足を室を閉ぢて自室に退き申候

○豫言者ならぬ身には本年將來の出來事を豫言する事も出來ず又千里眼ならぬ眼には透視の力もなき事故先づ不時の出來事は思ふ必要もなく只大正の精神と新希望とを以て我盡すべき本務を顧み誠意誠心努力して止まざらん事をのみ期し申候

○學校としての事業中小事は暫く之を措き茲に本年度中の一大行事にして稀有の事柄は抑も何かと申候に夫は外にても無之小生か預れる此學舎の新築記念落成式の舉行にて候小生は偶々此稀有の時機に際會せるを思ひて中心愉快に堪へざる次第に候然し單に喜ぶのみにては詮なき事如何にせば此式を完全有効ならしむ可かの計畫こそ最も肝要と存候不肖微力到底完全を期し難からんも此落成式をして我木曾山林學校の發展向上の一轉機たらしめ併せて回顧の好紀念と致度念願に御座候就ては此際學校直接關係の者は勿論學校に同情ある人士の協賛を得て午の歩みの遅くとも着々其目的に向て進候が更に進んで此鍵にて假奉安室の内部を巡檢し茲に神庫の前に立ちて最敬禮を了し

○次で小生は自分の室に入りて服装を正し沈思默想に入り候へ共何となく物足らぬ心地致し暫時停立思案致候未遂に御眞影奉安室の鍵に思を馳せ規定の所に在りや否や検査を遂げ候處何等異状なく先づ安堵致候が更に進んで此鍵にて假奉安室の内部を巡檢し茲に神庫の前に立ちて最敬禮を了し

まんのと決心致候
 ○今之が計畫を具體的に申すは獨斷に過ぎ候に付只小生の元旦計畫案を基として夫々學校關係者及此舉に同情ある人士に御相談申上げ其決議を本紙に發表する事と致すべし其節は何卒充分御助力願度今より希望致置候
 ○改元紀念の時代に遭遇し縣費負擔の建築物は着々進捗しつつあるに係らず農場の開墾見本林の植栽庭園の設計等は尙當春の事業とて眼前に吾人の奮勵を待ち居り候幸に百數十健兒等は此計畫を遂行するに遺憾なき事と信じ居候
 以上元旦早々思ひの數々を記して試筆の詞と致候敬具(大正二年正月旦記)

學術

建設電柱の保護方法

七宮生

木材消費額日に増加し恰かも文明と平行的なもの如きを以て或は木材消費額を見て其國文明の度を略知するを得んか則ち木材と文明とは兩輪双翼も管ならざる關係を有し文明は木材の供給によりて進み木材は亦た文明の進歩に伴ふて益々其需用を増加するは識者を俟て始めて知るにはあらずるなり就中文明は交通機關の發達を促すと夥しく是れが發達は從て木材消費額を増加すること甚だし所謂交通機關は木材源を潤渇せしむとの近世外人の嘆聲は蓋し此謂ならん故郷を辭し都會に赴くは豈獨り地方青年のみならずや壯齡の樹木も亦た悉く故山を去り都會に赴き山は老幼不具病木の淋しき訖住居と變せんとしつゝあるにあらざ

や是に於てか吾人は益々植林を奨勵し常に豊富なる木材を供給し文明の進歩に聊かも蹉跎せしむることなく一方利用方面に於て益々濫費を減ずるは勿論進んで消費額を節減し永久保續の策を講せざるべからざるが節約方法としては種々あるべきも各種用材の保存期を永からしむるも亦た其策ならん左に電柱需用と建設電柱の保護方法とに就き少しく説述せん
 合衆國に於ては電線の延長約八千哩電柱數三千二百萬本を下らず更新及新設の年消費約四百萬本則ち八年にして更新する割合なり吾國に於ては約六十万本平均七年にて更新するにせば年消費約八万六千本を要し之れが樹齡を五十年とするも年々五十餘町歩の純林を皆伐せざるべからず則ち單に之れのみにて約三千丁歩の電柱專用林を具備せざれば到底其需用を充分供給すること能はざるべし況んや新設數に於て年々増加しつつあるに於てや是に於て建設電柱保護は一方に於ては電柱用材を節減し自然濫伐に傾きつゝある森林保有の實を擧げ他方に於ては更新に要する種々の勞費を減ずる等國利民福上裨益する所決して少なからざるべし
 合衆國山林局の報告によれば敗類電柱百本中九十五本は腐朽により四本は昆虫により而して一本は機械的磨滅による割合なりと而して此大部分を占むる腐朽は有害菌類の寄生繁殖に原因するものにして之れには濕氣空氣及適度の温度を必要とす今建設電柱に於て其腐朽状態を観察するに地表面上部數寸下部一尺内外の部分は害菌の繁殖に好適するを以て腐朽も從て著しく他大部分尙充分使用に耐へ得るも此小部分の腐朽顯著なる爲め全柱を更新するの止むなきに至る勿論簡單に此部分に塗油の如き防腐劑を塗抹し幾分之れを防止し居るも未だ完全なる能はず近來ニューゼルシーの「老紳士」之れが保護方法を案出し大いに世の注目する所となりしと云ふ茲に參考の爲め其概略を紹介せん
 此方法は先づ既に腐朽せる部分を無害にし而して排水性の防腐塗料にて封じ以て以前注入せる防腐劑の蒸發を妨げ且つ空氣及濕氣を排除し今後の腐朽を妨ぐるにあり
 此方法を施行せんとせば先づ電柱莖底の周圍を二乃至一、五呎の深さに發掘し而して其腐朽部分を削去し然る後高熱の石炭釜見クレオソートを充分塗抹し以て腐朽原因の生物体を滅殺し且つ其組織内に浸透せしむ而して全長二乃至一、五呎の耐火性周壁を地上約六吋を殘し電柱の周圍に埋む此周壁は直經に於て電柱約一吋大なる圓筒形にして此電柱と周壁との間に數個の開口棒を立て約半吋の開口を存せしむ斯くして周壁が適當の位置に置かれたる後鬆土を以て周壁の基底並に周圍を充分堅く搗き堅め而して電柱と周壁との間にビッチの熱劑を注入す暫らくしてビッチ凝固すれば前に塗抹せるクレオソートを木材面に充分閉鎖せる完全なる結帯を作り全く空氣濕氣等腐朽に好適する凡ての働因を妨げ同時に腐打面に塗抹せるクレオソートの蒸發を妨ぐるに至る試験によれば斯くビッチ凝固すれば如何なる氣候の變化に遭遇するも絶対に柱体に密着し且つ表面の總ての小口を充實するのみならず或程度まで樹体に浸入し得てビッチ凝固後は其上をセメントにて被覆して終る次方法は斯く單簡にして且つ廉價也則ち其費用の如きは更新費の幾分に過ぎずして

友林蘇岐

普通電柱保存期一ヶ年の延長は實に此費用を償ひ得べしと而して此方法に於ては保存期を普通五年乃至十年延長するを得則ち僅少の費を投じ此法施行の結果保存期を二倍にすれば年消費額を半減し吾國に於ては實に毎年四萬有餘の電柱を節減し得る理なり此方法たるや果して斯く經濟的なるや今俄に其是非を茲に判斷すること能はざるも如何に彼國に於ては木材消費額の激増を憂懼し之れが防止策に苦心しつゝあるかの一斑を知るに足るべし實に木材は無盡藏にあらず昨の富林國今日亦富林國にあらず斯業に従事するもの、猛省を促す云爾

多數の林木に就き其の中央木の直徑及高さ算定する方法に就て

北村生

いくつもの異なる數に就て其平均數即ち中央數を求むるには此等の數を加へたる和を其加へ合した數のかずで除すれば求めらるることは何人も知る所であらう又三が二つ「四が五つ、五が八つ、六が五つ」と云ふ様に異つた數が各々一つ以上づつあると云ふ其平均數を求むるには次の算法に據る
 平均數 = $(3 \times 2 + 4 \times 5 + 5 \times 8 + 6 \times 5) \div (2 + 5 + 8 + 5) = 96 \div 20 = 4.8$

此の方法も算術で學んで皆知て居るであらう所で此の二様の平均法が深く腦底に浸み込んで居るため測樹學に於て多數の樹木に對し其中央木(中央木とは全林木の材積を其本數で除した商に等しき材積を有するもの即ち全林木に對する平均木を云ふ)を算定する場合に此の平均法を其備用ゆるもの

多い例へば

直徑	六寸	七寸	八寸	九寸	十寸
高さ	九間	十一間	十三間	九本	五本
本數	二本	九本	四本	九本	五本

の林木に於て其中央木を算定するに次の様

中央木の直徑

$D = (6 \times 2 + 8 \times 5 + 12 \times 9 + 15 \times 4) \div (2 + 5 + 9 + 4) = 220 \div 20 = 11$

中央木の高さ

$H = (7 \times 2 + 9 \times 5 + 11 \times 9 + 13 \times 4) \div 20 = 101.5$

因て中央木の材積は

$V = GHP = \frac{11^2}{4} \times 10.5 \times 0.5 = 5.94$

$VR = 5.94 \div 2 = 2.97 \dots \dots R$

$MR = VR \times N = 2.97 \times 20 = 59.40$

因て全林木の材積は

$VR = 5.94 \div 2 = 2.97 \dots \dots R$

直徑六寸の樹幹 = $2 \times 0.990 \times 0.5 = 0.990$

八寸 = $5 \times 2.262 \times 0.5 = 5.655$

一尺二寸 = $9 \times 6.220 \times 0.5 = 27.990$

一尺五寸 = $4 \times 11.486 \times 0.5 = 22.972$

合計 = $57.9 \dots \dots 607$

此通り前の算法で求めた材積は毎木法によつて求めたものより一尺七十九才三歩も過大の誤差がある確かに其算法は正當でないことが判つたであらう

然らば前の算法は如何なる点が間違つて居るか云へば其中央木の直徑と高さの算定即ち直徑と高さの平均法が誤て居る而も直徑の平均法はお話にもならん大間違をやつて居る元來樹幹の體積は其直徑の自乗又は胸高斷面積(簡便のため以下底面積と稱す)と高さの正比例するものである(底面積は直徑の自乗に正比例す)故に高さの等しき樹幹の直徑が二倍となれば底面積も材積も四倍となる、又材積が半分になれば底面積は半分となるが直徑は二分の一の自乗即ち四分の一となるのである夫れ故多數の林木(樹高の等しい場合)平均に等しき材積を有する所の中央木は其底面積も亦全林木の總底面積の平均に等しき大さを有する筈である因て其中央木の直徑を算定するには全林木の底面積の和を全本數で除して平均底面積即ち中央木の底面積を求め夫れに四を乗じ圓周率を除すれば得らるる又各林木の直徑の自乗を合計し之れを全本數で除し其平方根を求めれば夫れが中央木の直徑となる前の例に於て各林木の高さを等しきものと假定するならば其平均直徑は次の通りである

底面積合計 = $2 \times 28.27 + 5 \times 50.27 + 9 \times 113.10 + 4 \times 176.71 = 2082.68 \dots \dots$

平均底面積 = $2082.68 \div 20 = 104.134$

中央木の底面積 = $2082 \div (2 + 5 + 9 + 4) = 101.6315$

中央木の直徑 = $101.6315 \times \frac{4}{\pi} = 11.4 \dots \dots$

又直徑の自乗によつて計算すれば

直徑自乗の和 = $2 \times 36 + 5 \times 82 + 9 \times 129 + 4 \times 152 = 2588$

中央木の直徑 = $\sqrt{2588 \div 20} = 11.4 \dots \dots$

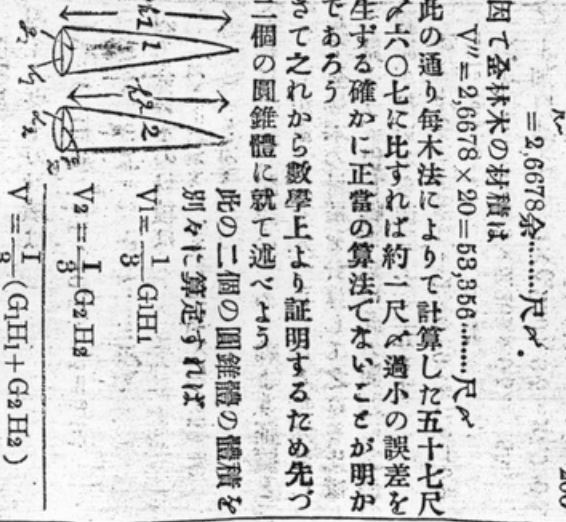
斯様に何れも一尺一十四分弱なるが之

は不思議でも何んでもない数理上當然のこと
 ことで之れが一致しなかつたならば其数理が
 間違つて居るのである、そして茲に述べた理
 論と實例に依つて前の平均法即ち單に直径を
 加へて平均する方法は根本的に間違つて居る
 ことが判つたであらう

次は中央木の直径の算法であるが前に述べ
 た様に樹幹の體積は直径の自乗又は底面積
 と高さとの正比例するのであるから直径の
 平均法は底面積又は直径の自乗に就て平均
 したが高さの方は其數其儘が材積と正比例
 する即ち直径の等しい場合ならば高さが二
 倍になれば材積も二倍になり、又材積が三
 倍になれば高さも亦三倍になる、例へば五
 間と六間と七間との三様の高さを有する同
 直径の樹幹があるならば其五、六、七の平
 均に等しい六間の高さを有する樹幹の材積
 は丁度其の三本の總材積の三分一に等しい
 即ち其三本に對する中央木の直径は五、六
 、七の和を三除したものである、から直径
 の等しい多數の林木に對する中央木の直径
 を求むるには前に述べた様に各林木の直径
 の和を全本數で除すれば宜しい即ち前例に
 於て各林木の直径を等しくし、即ち前例に
 ならば其平均高は前計算の通り十間五分と
 なる

然るに此の平均法は直径の平均には各林木
 の高さが總て等しいと假定し又高さが
 平均には各林木の直径が總て相等しいと
 假定した組合の算法である、處て實際の
 林木は高さが違へば直径も等しくない、又直
 径が異なる場合は高さも亦等しくない、から
 實際に測樹をなす場合に多數の材木に對す
 る中央木を算定するには此の算法を用ゆる
 事は出来ない、然るに世間には相當の學力
 のある人で此の間違つた算法を平氣でやつて

居る者がある、此の證明をなす前に尙念の
 ため前例に就て實際に計算して見よう
 中央木の直径 = 11.448
 全底面積 = 101,6315.....平方尺
 全平均高 = 10.885
 全材積 = 101,6315 × 10.885 × 0.5 × 0.5 × 200
 = 2,6678.....尺³



因て各林木の材積は
 $V = \frac{1}{6} \pi d^2 h = \frac{1}{6} \pi (G_1 H_1 + G_2 H_2)$
 $V' = 2,6678 \times 20 = 53,356.....尺^3$
 此の通り毎木法によりて計算した五十七尺
 六〇七に比すれば約二尺を過小の誤差を
 生ずる確かに正當の算法となることが明か
 であらう
 之れから數學上證明するに先づ
 二個の圓錐體に對して
 此の二個の圓錐體の體積を
 別々に算定すれば
 $V_1 = \frac{1}{3} G_1 H_1$
 $V_2 = \frac{1}{3} G_2 H_2$
 $V = \frac{1}{3} (G_1 H_1 + G_2 H_2)$
 次に前例の方法により高さ及底面積(直径
 にて全じ)の平均を求め之れによりて算
 定すれば
 平均直径 $d = \frac{H_1 d_1 + H_2 d_2}{H_1 + H_2}$
 平均一個の體積 $V = \frac{1}{3} \pi (G_1 H_1 + G_2 H_2)$
 因て二個の圓錐體の體積は
 $V = \frac{1}{6} \pi (G_1 + G_2) (H_1 + H_2) d$
 此の平均法の間違つたものであることは前の實例

で証明した通りであるから V から V' を減
 して $V - V' = 0$ とはならぬ
 $V - V' = \frac{1}{6} \pi (G_1 H_1 + G_2 H_2) - \frac{1}{6} \pi (G_1 + G_2) (H_1 + H_2) d = 0$
 $(G_2)(H_1 + H_2) = \frac{1}{6} (2G_1 H_1 + 2G_2 H_2 - G_1 H_1 - G_1 H_2 - G_2 H_1 - G_2 H_2)$
 $= \frac{1}{6} (G_1 H_1 + G_2 H_2 - G_1 H_2 - G_2 H_1)$
 $= \frac{1}{6} (G_1 - G_2)(H_1 - H_2)$
 $= \frac{1}{6} (G_1 - G_2) \frac{H_1^2 - H_2^2}{H_1 + H_2}$
 $= \frac{1}{6} (G_1 - G_2) \frac{(H_1 - H_2)(H_1 + H_2)}{H_1 + H_2}$
 $= \frac{1}{6} (G_1 - G_2)(H_1 - H_2)$
 $h_1 = h_2$ とすれば
 $d_1 = d_2$ とすれば
 $\frac{1}{6} \pi (G_1 - G_2)(H_1 - H_2) = 0$
 又兩者の直径が等しくなるとも高さが等し
 くなる場合 $d_1 = d_2$ とすれば
 $V - V' = \frac{1}{6} \pi (D_1^2 - D_2^2)(h_1 - h_2)$
 $h_1 = h_2$ とすれば
 $V = \frac{1}{6} \pi (D_1^2 - D_2^2)(0) = 0$

高さの何れかが等しい場合には前の平均法
 で間違はないことを証明することが出来た
 のである

然らば直径も差う高さも等しくない實際の
 林木に對して其中央木の直径と高さを算定
 するには如何にすべきかと云ふに夫れには
 二様の方法がある

其一は先づ前述の方法に據つて平均直径を求
 め(一尺一寸四分強となれり)別に全林木の
 材積の和を全本數で除して中央木の材積を
 求め夫れを幹形數で除して圓柱體積とする
 此際其體積を立方尺に改算するが便なり
 次に前の平均直径から平均底面積を求めて
 夫れで此の圓柱の體積を除すれば其商が中
 央木の直径となる前例に就て計算すれば
 毎木法によりて $V = 57,607$
 求めたる全材積 $V = 57,607 + 20 = 2,88035$
 中央木材積 $V_1 = 2,88035 + 0,5 \times 12$
 $= 69,1284$
 立方尺 $V_1 = 2,88035 + 0,5 \times 12$
 $= 69,1284$

平均直径 $d = 1,148$
 全上の底面積 $G = 1,016315.....$ 立方尺
 平均直径は前に越算例を示せる故茲には
 省す
 中央木の直径 $h = \frac{62,1284}{1,016315} = 68, R 02$
 $= 11 間 3 8 7$

前の平均高十間半に比すれば約一四弱の差
 を生じが尙各林木の直径及高さの差が大なる
 とは其差も亦更に大なるのである
 其二は先づ前述の平均法によりて平均高を
 求め(拾間半となれり)次に其一の方法に準
 じて中央木の直径を求むるのである即ち
 其一に於て算定せる中央木の材積に幹形數
 及12を乗じて得たる圓柱體積
 V_1 立方尺 $= 69,1284.....$ 立方尺

前述平均法によりて算定せる平均高
 $h = 10 間 5 = 68$ 尺
 中央木の底面積 $G = 69,1284 = 1,097276$
 平方尺
 全上の直径 $d = \frac{1,097276}{\pi} \times 4 = 1,148$ 尺
 即ち其一の算法による中央木は
 直径一尺一寸四分弱高さ十一間三分強
 其一の算法による中央木は
 直径一尺一寸四分強 高さ十一間五分
 處て同一の材木に對して二様の中央木があ
 ると云へば或は變に思ふかも知んらが一向
 變でも不思議でもない當然のことである何
 と云へば中央木とは全林木に對する平均の
 材積を有するものを云ふのであるから假
 其直径と高さが等しくなくとも其材積が等
 しいならば中央木である即ち其一二に於て
 算定した二様の中央木は其直径と高さは差
 うも其材積は全く相等しいのである即ち
 其一の中央木の材積

其一の中央木の材積
 $V_1 = \frac{1}{6} \pi d^2 h = \frac{1}{6} \pi (1,148)^2 \times 11,387 \times \frac{1}{4} = 2,88035.....$ 尺³
 $= 1,016315 \times 11,387 \times \frac{1}{4} = 2,88035.....$ 尺³
 其一の中央木の材積
 $V_2 = \frac{1}{6} \pi d^2 h = \frac{1}{6} \pi (1,148)^2 \times 11,5 \times \frac{1}{4} = 2,88035.....$ 尺³
 $= 1,097276 \times 11,5 \times \frac{1}{4} = 2,88035.....$ 尺³

調査

林業見聞録 久保田洋舟
 余昨年暑中休暇の一部を割きて郷里下伊那
 郡の南端に位せる遠山(和田村外四ヶ村)に

至りてこの林業家を訪れ親しく其説を聴
 きりしが山林を視亦王子製紙會社出張所をも
 訪ひて調査し
 われ素觀察の力乏しく又文筆に拙し、され
 る左は吾が婆心の筆端に表はれたるもの見
 らん人の參考ともならば之に過ぎたる幸はあ
 らず

(一)和田村鳴澤治郎吉氏の植林事業
 鳴澤氏に就きて聞き得し所及氏の植林地を
 視心に浮びしやを綴りて此處に誌す
 (二)同氏植林事業の創始 氏の植林事業を
 創始せしは明治三十年頃にして盛んに植樹
 するに至りしは三十七年以來なり氏は造林
 費を節約することに極力意を用ふるを以て
 事業は頗る經濟的に行はれつゝあり、氏個人
 經營の外他人と共同經營のもの亦多し
 (三)林地の購入 是迄購入したる林地は公
 賣に附せられたるもの若しくは賣者の希望
 に依りたるものなるを以て頗る廉にして坪五
 厘(一町歩十五圓)位に當れり、現今此地方
 の林地賣買價は坪五厘乃至一錢(一町歩十
 五圓乃至三十圓)なり、當地方林地賣買に
 は坪を以て單位價格を定むるの習慣なり而
 して此賣買には生育せる雜木附帶し居り中
 には用材として利用し得らるものもあるを
 以て林地價は一層廉となるの理なり
 (四)苗木 苗木は自家製苗木を主とし補助と
 して購入苗木をも用ふ

(五)苗圃、苗圃は三箇所にあり、氏が單獨
 經營のもの二反三畝歩、他人と共同經營の
 もの三反歩あり、内播種苗圃は二畝歩にし
 て年々之に播種す、苗圃地は山地を掘起し
 たるものにして成績良好なり、苗圃の地方
 衰ふるに至れば復た新に山地を開墾して苗
 圃を造り舊苗圃は之に植樹す、而して播種
 及移植其他の手入は甚粗放にして最經濟的

友林蘇岐

に行はる、
 (ロ)樹種 杉樹を主として其他樟、ビヤクダンあり本年始めて播種せりと云ふ木曾五木もあり
 (ハ)播種 播種量は杉樹共に坪三合五勺乃至四合とす、播種方式は散播を取り播種期節は四月末なり
 (ニ)苗圃肥料 肥料は油粕を用ふることあれども多くは糞糞を用ふ、其施用方法は乾燥保存したるものを苗木發生後床上に散布するなり、實験上糞糞は油粕等に勝り成績最良と云ふ、播種苗圃に於ける基肥は之を施さず
 (ホ)移植 杉は滿一年生にして移植す、檜は滿二年生迄は儘播種苗圃に置くことあり、幸二回床替は山地植付の前年山地に於ける移動苗圃に移植培養す、されど亦苗圃より直に山地に植付くることとなして第二回床替を省察することあり
 (ヘ)苗木價格 自家製のものは一木三厘乃至四厘の生産費を要す購入苗は多く愛知縣より求め一萬本十四五圓也但し此苗木は若苗にして一二年間培養の必要あるものとす補植苗には大なる良苗を用ふるを以て一錢程を要す、以上は杉樹を通じての概畧の價なり
 (四)地持 氏の林地は既植地、未植地共に概ね雜木生成せるを以て比較的地持費を多く要するの狀態にあり、然るに此地方には地持をなすに當り最便利なる制あり、それは土着の小作人なる者をして無償にて地持をなさしめ其代償として、植林後三四年間林木の間に間作をなさしめ其收入の全部若しくは大部を給與するの制を取れるなり而して地持法は焼拂法を用ひ刈取りたる雜草灌木は堆積して之を焼き大木は立木となし
 (利用し得るものは之を伐採利用す)て腐朽せしむ、間作物の種類は大豆、小豆、粟を主とし稗、蕎麥、馬鈴薯等をも作る、植林地を見廻りて目のあたり間作物の生育を見るに其良好なる事立派なる畑に作りたるものと異るところなし而も三四年間連作収穫することを得、以て地質の良好なるを知るべし、而して間作の結果除草及耕耨行はるるを以て之を行はざる所よりも却つて林木の成長良好なり、又地持後一年位前作をなさしめたる後植林することあり
 (五)植付 苗木を山地に植付くるに當りて杉樹等凡て良苗は苗圃より直ちに山出しとなし稍不良の苗は一年間山地に移植養成したる後植付くることとなし居れり、植付の間隔は六尺に七尺乃至七尺に八尺とす、苗木の年齢は杉は滿三年若しくは四年生植は四年若しくは五年生とす
 植付費支拂は多く日備拂とす日備賃は一人一日食料元給(事業經營者)を云ふ負擔にて二十八錢乃至三十錢にして植付出來高は一人一日百四五十本なり普通植付二厘と稱し居れり
 (エ)下刈 此地方の下刈法に二種あり、一は全刈法と稱し樹間全部に行ふものにして一は坪刈と稱し林木の周圍枝張り面積に等しき面積刈るの方法なり、坪刈法は樹木の根と枝とは伸張面積等しきものなりとの原理に基き根の張る部分の雜草のみ刈らんとする方法なり、下刈の回数別に之を定めず時宜に従ひて之を行ふに用ふる鎌は下刈用鎌と稱し總重量二百五十匁長さ一尺巾一寸五分ありこれに六尺の柄を附して草を薙ぐに便す、又兼ねて鉋の用をなす
 (七)同氏所有の林地面積 總計二百五十町歩あり内植栽濟の面積は五十一町歩植約百七十町歩なり
 (八)總括 同氏の林地は何れも肥沃にして特に木澤村字柿之嶋の地域は最も良質地にして杉の適地たるを信せり、余は柿之嶋及八重河内植林地を見たり、此の區域の既植樹種は杉を最とし檜之れに次ぎ落葉松亦少からず年齢は杉は五年生より十二年生に到り檜は畧之と同齡落葉松は十二年生のものみあり
 氏の植林は(此地方林業家は總じて)總じて粗植なり、之間作をなすの關係上密植は不便なるを林地比較の廉なるを以ての故なるべし加之同氏は粗植の主張者にして粗植して林木の生長を速かならしむるが有利なりとて粗植法を取り居れる如し、此粗植に付ては余初め之を誤れりとなせり即ち粗植となす時は林木の枝を生ずること多く從て樹形稍殺となるを免れず、曳ては材質を不良ならしむるに到る、加ふるに如何に廉なる林地とは云へ之を空費するは將來頗る不利なるを以てなり、然れども再考するに及び粗植も此地方に於ては良策なるべきを感じぬ、即ち此地は素氣候の關係より林木の生長頗る早く爲めに材質良しからず所謂天龍杉として早く大材を得るを特徴とす、故に事ろ粗に植えて此特徴を助長し収穫を速かならしむるを得策とすればなり
 (九)王子製紙會社和田出張所事項調査 王子製紙會社は東京府下王子町にあり、王子及氣田(静岡)中部(静岡)苦小牧(北海道)の四工場あり
 今中部工場和田出張所につきて調査したる事項を次に掲げん
 (一)會計 當所勘定は分社勘定購買勘定雜損益勘定和田貯藏品本谷貯藏品滿島貯藏品運送中貯藏品假拂金及現金等にして支拂日

友林蘇岐

は毎月廿五日を以て總勘定をなす專に豫定しあるも現金等の都合により一部金の支拂をなすことあり又支拂すべきものの性質如何によりては、又幾分遅延することもあるべし、契約により一定の期限あるものは勿論の期日に支拂ふべきものとす
 (二)物品購入 人夫其他へ給すべき物品中其主たる白米は中部分社より運搬するも其の他の雜品に至りては地方商店に於て購入するを常とすされど地方商店になき場合は飯田地方其他より購入することあるべし、價格は購買標準價格なるものありて物品購入をなさんとする場合には何れも此標準價格以内とす、貸渡しに際しても亦之による、白米は其年の抽厘代並に人夫の天上(人夫の役名にして賃銀を定むる標準となる)によりて變更することあるべし
 但し別に賣買標準價格を添布す
 物品賣買標準價格

品目	單價	賣價	備考
白米	四、〇〇〇	六、〇〇〇	單價は出張所々在地に於ける價格、賣價は山地事業所の價格なり
味噌	二、五〇〇	三、五〇〇	
草鞋	二、〇〇〇	三、〇〇〇	
溜草	二、〇〇〇	三、〇〇〇	
石油	二、〇〇〇	三、〇〇〇	
燭竿	〇、八〇〇	一、〇〇〇	

以下重要な物品にあらざるを以て省畧す
 (三)和田出張所の伐木事務取扱事項 此事項を通覽する時は同出張所の伐木事業經營法の一斑を知るを得んが故に此に之を掲ぐ
 (一)抽 日備組入山の時は別に定めたる備品を貸與す
 (二)抽 日備人夫には山方慣例により入山酒壹合宛を給す、但給與するの時期は區

所の都合上何時にても差支なし
 (三)日備人夫入山の時には人別所(人員調書)を徴し山入棹(爲の柄にして山入の時に與ふるもの)壹本を與ふ、但定用人夫に限る、事業所に於て棹を毀損せし時代人より出したる切符と其毀損棹とを以て代り棹の請求をなす者あらば直ちに之を渡すべし
 (四)事業現場に於て必要の器具は代人よりの請求書によりて總て貸與すべし
 (五)毎月一日には各組と勤雨(出缺と云ふが如し)其他の打合をなす
 (六)毎月一日には山方慣例により各人夫に日待酒一合宛を支給す、但其際請負中の者には之を給せす
 (七)舊盆には十四十五十六の三日間事業を休止し備夫には雨扶持を給與す、但十七日に出勤せざるものには右三日間の扶持米を給與せす
 (八)舊盆には地方の會社に關係深き者に限り二尾宛の進物をなす
 (九)渡入式は總須より提出する人夫面附書に基き調査を遂げて執行すること
 (十)木材を本川筋へ畧ば拂込たる時は別に定めたる如く地方へ川觸をなす
 (十一)北俣渡以上の堰芝採集には備夫を以てし毎年地方の者をして請負はしむることあり、但請負とする時は年度により變更することあるも前年來は大芝壹錢五厘小芝七厘とせり
 (十二)北俣以下の堰芝採集には備夫を以てするを廢止し凡て地方の人民をして採集せしむ、但芝買入に就いては社員或は代人の中に於て特に芝買入者を定め嚴重に監督せしむ
 大芝の束は五尺繩にて括るを限度とし木

葉は籠にて量るものとし大芝壹把一錢八厘木葉一籠七厘とす
 (13)葡萄澤渡以下にある日備小屋には一棟に付金三圓の敷地料を土地所有者に支拂ふ
 (14)日備人夫宿泊米錢は壹人に付二錢五厘とす
 (15)金所人夫宿泊米錢は壹人三錢五厘とす
 (16)借家料は宿泊日數に應じ壹日金二拾五錢より五十錢を支拂ふものとす
 (17)新曆年越には備夫壹人に付酒壹合宛を給與す
 (18)舊曆年越には備夫壹人に付糯米三合酒二合鍋二尾宛を給與す、但糯米は二十八日頃に酒肴は三十一日に給與す
 (19)抽日備事業終了の上精算を受け入山の際借り受けたる備品を返納したる時は山方慣例により勘定酒壹合宛を現在の人夫に限り人別書を徴して給與す
 (20)代人には每晚壹人に付酒壹合宛給與す但日待及祝日等には多量に給與す
 (21)總頭及代人小使等精算迄勤続するものには歸省旅費一里四錢宛を給與す
 (22)新曆年越には代人以下へ多量の酒を給與す
 (四)精算
 (1)抽夫の賃銀は抽夫より提出する面附書(日備の賃銀定表)によりて支拂ふものとす
 (2)抽夫常用扶持米は勤工一人に付米九合味噌三十匁三勺汁の實二厘五毛雨休の際には米を七合とし其他は上に依る
 (3)伐採したる木材の厘代金は別に定めたるものによる
 (4)日備人夫は勤工一人に付米八合雨休には七合とし味噌、鹽、汁の實代は抽に同じ
 (5)四月より九迄月は四九米と稱し炊夫茶

九日より十三日は本部讀書村に十四日より十七日は田立村に出張本縣主催林業講習に係る竹林學の講演を試みられ候が講習終了生は讀書村四十九名田立村七十五名の多數に上り何れも熱心に講習を受け本縣より終了證書を交付されし由に候

○一月廿日午前九時半始業式を挙げ職員生徒互に一堂に會し無事を喜び合ひ候當日校長の訓辭は二時間に亘り候が先づ休暇中の出來事を叙し將來の計畫を述べ希望と訓戒と所感と交々至り生等をして感奮興起する所ありしめ候即ち寒中の事業として廿一日より向ふ廿日間學劍の寒稽古を行ふこと尚今川崎教授囑託を高田に遣りスキーの講習を受けしめつゝあること同氏の歸校を待ちて其實演を目撃するを得べく追々全學生徒に傳習せしむること向本年秋期に於て新築落成記念式を擧ぐる豫定なるを以て今より着々其目的の向て計畫を立つべきこと等にして最後に同窓生鈴木福重君の病死を告げられ一同痛悼の念に打たれ申候

○昨年より本年一月にかけて参考室備付の目的を以て寄附せられし芳名及び品目左の如くに候

第十二回運動會寫真六葉 岡本米次郎君
靜岡縣立中泉農林學校視察土産安藤校長
神の羽衣(名和昆虫所製昆蟲繪ハガキ)全
昆虫文鎮壹箇
化龍杖壹本(高知縣高
岡郡床岡産斑竹製)
硯箱壹箇(山形縣産黒柿製)
心身修養不老不死一部
日心教講話一部
龜彫刻東一本
淺間山模形壹箇(石膏製)
臨盆水利組合の事業一部

校友消息

○三年生坂田、大久保兩君及び二年生齋藤君は今度の休暇に歸省せず福島に滞在在中宮越區有立木材積の調査を依頼され調査完結せるを以て本月十七日付日義村長の名義を以て慰勞として金十五圓校長宛謝狀に添へて配贈方申越し來り

○第三回卒業生杉本能平君第六回卒業生宮川永三君同峰須賀宮次郎君の三名は本年一月夫々少尉に昇進せられたり

○三年生鈴木福重君は去年十月病を獲て歸省爾來愛知病院に入院療養せられしが藥石効なく本年一月八日同病院にて遂に永眠せられたる旨嚴父より通報あり同君は學業に熱心に又篤風會委員として職務に忠實に同人間に重きをなして今此悲報に接す誠に痛惜に堪へず仍て校友會は香奠として金壹圓に弔辭を添へて送る事とせり

○第三回卒業生宮下信一君は昨年十一月を以て福島町自宅に齒科醫開業の披露式を擧げられ爾後熱心斯業に従事せられたりあり因に齒科醫は從來當郡に一人も在らざりし事として地方人の嚆望の的となり將來の發展期して待つべき模範なり

○川崎本校教授囑託は學校便りにも記載せし如くスキー講習の爲一月十四日高田に赴き十五日より講習を受け目下練習中なるが廿五日頃は歸校せらるべし

寄宿舎便り

改元第一春に筆をにじらせて寮の近狀申上候へども御諒中なるを以て校長先生並に舎監先生を御招きして心ばかりの忘年會を致し候

十二月二十四日には例年の通り忘年會有之候

○川崎本校教授囑託は學校便りにも記載せし如くスキー講習の爲一月十四日高田に赴き十五日より講習を受け目下練習中なるが廿五日頃は歸校せらるべし

朝鮮より

第三信 西野 入徳

百度を越ゆる數十度つひ此頃迄は酷烈なる暑さに苦められし北鮮も今は木曾よりも一入寒く相成り潤き鳴鶴江も全く氷に鎖され朝鮮と滿州との境界は取り除かれ兩國間の交通は頗る至便と相成申候餘念もなく江上にスケートを試むれば身は何時しか知らぬ間に滿州内へ滑走致し居候、滿鐵の廣軌線にぶつかりて去日清日露の兩戰に洗せし事も屢々にて去日清日露の兩戰に洗せし同胞幾多の鮮血今は白雪に掩はれ其影を留めず候、たゞ此處彼處に突立つてつん烈く様な寒風に凜然として曝さるる紀念碑のみ

その其かみを偲はせ申候
此度は當地營林廠のあらまし申上げ重君の御眼を汚し度思ひ候

朝鮮に山はあれ共林なしと一般世人に相場を踏まれし此朝鮮も國境なる鳴鶴江及豆滿江の上流には尙ほ未だ人跡到らざる原生林有之有名なる木會の美林にも劣らぬ木株老木生ひ茂り居り候而かも其範圍は木會のれより遙に廣く大畧二百餘萬歩に亘り其蓄積約四億尺に及び候此中鳴鶴江沿岸に屬するもの約七十萬町歩二億四千萬尺、豆滿江沿岸に屬するもの三拾萬町歩一億六千萬尺と號し候樹種の重なるものはカラマツ、テフセンゴウ、トウヒ及シラベトし其林價如何に低廉に見積ると雖も尙數千萬圓に及ぶべく實る朝鮮唯一の貯木庫に候されば營林廠は管内數ヶ所に伐木所を設け年々數千萬の木材を伐出し解水に到れば鳴鶴江と稱し日鮮清の三國人を載せて續き大江を流下致し其大部分は數千萬方の製材場に持ち込み敏速に種々の製品となし汽車汽船の便をかりて半島内到處に供給し尙ほ滿州南清及内地へも輸移出致し居り候

其の製材高は年により不同に候へども大概三十萬尺より六十萬尺内外に於て其賣上高は百萬圓より百數十萬圓の間に有之六分乃至八分の純益金を納めつゝ有之候

而かも日と共に激増し行く朝鮮木材の需用には到底充分に應ずべくもあらず年々内地及支那米國等より百數十餘萬圓の木材輸入超過を示し居り材價は刻々騰貴するのみ候是迄の需用は多く官衙公署等に限られしと雖も昨今民業一層勃興の氣運に向ひしを以て木材需用の激増は實に火を見るより明かに候されば本年嶋に於ては材質の如何

佛都便り

△逢ふた嬉しき別れの辛らさ逢ふて別れが無けりやよい……會門を辭して十年目、舊師友に會するの歡は又別なるべし、圓滿なる松田恩師新に迎へたる徳望高き安藤校長の十年の親誼を交はす歡聲沸かざらんとし不能、時は丑癸二年一月六日市下西洋軒に集りたるは

大林區署原田、中村、坂本、若林、征矢野、吉澤、長野、小林區署金井、上田、小林區署齊藤、森、縣廳客員西澤先生、小池、篠原

の諸君並に余の十有五名

而して來るべくして病氣中には奥さんの看護の爲めもあり又は事故により欠席せられ電報又は書面を以て通知ありしは和川川崎杉本高橋(舊姓宮下)次兄野の諸兄

△職務の同僚は和すべくして親和し難く上官は單に利己の爲めに恭しく奉戴すれども獨り師弟に在りては校門内に轢る事ありとすも社會に出するに及んで愈々情緒濃師終生忘る能はじ……とは同日一人の唇より

蘇門會所感

蘇門會所感 會 山 子

乾坤一轉沈痛に滿ち加之多幸なるべき大正の新春を迎へ茲に會門を辭して活社會の青年と伍し日々激烈なる奮闘に連れ回顧して往時を偲べる吾徒同志が市下に相會して往時を談じ將來を卜すべく恩師松田前校長安藤新校長を請じ一夕を意味あり且つ有益に過さんとして嚮に徹を四方に飛ばして贊同を求めたるは余が敬愛せる諸君の等しく熱知せられ且つ其舉に對しては双手を擧げて御贊同ありしを自ら信するものなり思ふに校門を去りて東西幾十里に散在し各相異

友林蘇岐

りたる境遇に在り各自重且つ大なる責務にせし諸彦各位の芳名を左に記し謹んで御禮申上候

居る年一度の通信だに難しとする所況んや昔に歸りて一堂に快談を交ゆるの到底不可能なる素より言ふを須ひざる所なり而して亦素より蘇友二百四十餘名の會同を豫期するが如きは木に縁りて魚を求むるよりも難きは余と雖熟知する所の事柄なり

然れども余は此儘を以て一言を費さざるべからざるは蘇友の間今一層温き情緒の賑れる連絡を欲しきなり即ち兩恩師が他を以て代ふべからざる須要なる公私の用件を繰り合せられ遠路御來臨多敷の舊子弟又は多數の母校出の青年と活氣に満ちたる愉快なる一夕を賑はしく過されんことを豫期せられてせられしに不拘來り會するもの上田町よりの齊藤森兩君を除く外は全部當市在住の諸君のみにして僅々十數名に過ぎざりしは主唱者の不徳の致す所にも依るべしと雖兩恩師に對し何の辭を以て申し披きせんとするか余は根柢只管不徳を謝する外なく返へすも遺憾此の上なきなり

た互に何等かの事情は必ず伏在す然れども其間の緩急と大小輕重とを稽查して一人たりとも多數會同し思師と膝を交へて舊を語り新を迎ふる事の有益にして如何に師の君に對し又他同窓諸子に對し敦厚なる禮節なりしやを悟られ度きものなり殊に出席を報じつつ一應の挨拶なき欠席者又此の附近へ歸省されし諸君に對して敢て此の一苦言を呈するの苦悶を懐ける余の憐れさよ……

謹而改年の御挨拶申上候

大正二年一月

長野縣立木曾山林學校職員等一同
追て校友會又は學校宛新年の御挨拶を辱く

- 杉本貢君 南佐久郡立農學校職員御一同
- 宮澤嘉一君 更級郡立農學校職員御一同
- 倉科浦一郎君 遠藤宗作君 坪倉藤三郎君 下高井郡立農學校職員御一同
- 田林君 都竹武次郎君 熊谷雅美君 吉田佐十郎君 江畑猷之允先生 森正治君 遠藤治一郎君 西澤靜人先生 萩原惠治君 鹽川金治君 長谷川大助君 吉澤一君 神戸利八君 伊藤正之助君 丸山久雄君 古宮政由君 齊藤正雄君 久保勝三君 上田高等女學校職員御一同 藤田要吾君 東原智君 田中泰吉君 松川久吉君 小羽根安治君 下畑德十君 小藤作四郎君 倉林清吉君 中澤興一君 本多清左衛門君 野知里慶助君 河野長六先生 高野金作君 金井澄水君 吉澤英雄君 坂本忠治君 林恒君 嶽野利雄君 北澤時三郎君 一之瀬製裝壽君 赤倉藤太郎君 伊藤徳之亟君 塩澤英一君 長谷部兵治君 小石彌三郎君 兒野榮君和田宗吉君 木下稗藏君 篠原爲一君 倉澤眞君 松本清太君 征矢野余所夫君 廣瀬靜之進君 柳澤邦信君 大森久次君 芦澤庫三君 征矢朴郎君 原喜四三君 柳澤熊治君 新田忠次郎君 西野入徳君 林與五郎君 岩久保宗治君 宮澤清輔君 篠原昇士君 南勝右衛門君 和守衛君

- 松澤莊太郎君 村松一清君 宮崎惠喜太君 小山田善四郎君 多田慶次郎君 仲俣伍市君 平田稻男君 大脇又衛君 竹内房太郎君 古根是君 中澤揚君 小林秀一君 田近善右衛門君 (以上順序不同、但じ〇印は學校及校友會宛二通寄せられし分)
- 尙新年に際し歸省の序を以て本校を訪問せられしは 岡西謙三君 高野薫見君 征矢朴郎君 肥田幸一郎君の四名とす

會費領取報告

一 金壹圓 鶴殿 正雄君
一 參拾六錢 奥原 吉次郎君

江畑前校長へ紀念品

贈呈寄附領取 米山 修君

一 金壹圓 小計壹圓
累計壹百六圓五拾錢

校友會宛寄贈書目左の通り
校友會雜誌第九號 新潟縣立加茂農林校友會
瑞穂第二十號 岐阜縣立農林學校々友會
農林新報第四十七號 奈良縣立農林學校々友會

209
143

明治四十四年六月十四日第三種郵便物認可